■研究十二月往来〈244〉

能〈鷺〉と平家

薦田治子

能〈鷺〉は《平家物語》に含まれる話を能に脚色したもので、筋をふくらませ、寺院で行われていた延年の劇と、風流の鷺舞をそこに取り込んだのではないかと考えられている（松岡一九八四：二三）。《平家物語》の鷺の話は、〈朝敵揃〉と〈延喜聖代〉の二ヵ所にほぼ同文同旋律で現われる。以下では平家（平曲、平家琵琶とも）について、簡単に説明し、のちに《平家物語》では鷺の話がどのように扱われているかを述べてみたい。

一．平家について―種目名　平家は『平家物語』を琵琶の伴奏で語る声楽曲の種目名である。現在では、平曲とか平家琵琶と呼ばれることがある。音楽としての平家の伝承が明治時代以降衰退したのにたいして、文学作品としての『平家物語』の研究が盛んになったため、平家といえば、平家一族か、文学作品の名を意味するようになってしまった。しかし、平家一族は、源氏に倣って平氏と呼べばいいし、『平家物語』は略さずに呼べばよい。たとえ平家と略しても、文学のことであるかどうかは文脈でわかる。世阿弥も、義太夫もこの音楽種目を「平家」と呼んだ。狂言にでてくるのも「平家」である。平家の伝承を担った当道座でも「平家」である。大正から昭和にかけての一時期、国文学者や歴史学者の都合で、平曲とか平家琵琶という名称が用いられるようになり、一部の音楽研究者も同調した。が、歴史との整合性や後代の研究者のためを考えれば、明治時代までの六百年間使われ、現在も伝承者の間で使われている「平家」という種目名を残すべきであろう。

二．能と平家　能も平家も、歴史的に見ると、日本の中世に生まれ、十四、五世紀に流行し、数多くの中世芸能のなかから生き残り、江戸時代に古典化して幕府の式楽となり、また武士階級を中心とする知識層に趣味教養として享受され、現代に伝えられたという共通点を持つ。

また、音楽的に見ても、平家は曲節（能の小段にあたる）の組合せで音楽が作られ、上音・中音・下音などに相当する基礎音があり、ひとつの曲節のなかでも基礎音が上下に推移するなど、能と多くの共通点がある。また、江戸時代に平家の稽古をする愛好家たちは、それまで譜本（楽譜）のなかった平家に譜本を作る際、謡本を参考にしたと思われる。

もちろん違いもある。能は歌舞劇で大勢の演者によって上演されるが、平家は語り物で一人で演奏される。伴奏楽器も異なる。能の詞章は基本的に七五調であるのにたいし、平家の詞章は散文体である。能には地拍子があるのに、平家にはない。

しかし全体的に見れば、能と平家は似たような歴史をもち、似たような音楽構造をもっているのである。

三．習物と小秘事　現行の《平家物語》は、〈祇園精舎〉とか〈那須与一〉といった約二百の曲に分かたれており、これが、演奏や伝承の単位になっている。それらは江戸時代に、教習の段階に応じて、平物、習物、秘事に分けられていた。鷺の話を含む巻五〈朝敵揃〉は習物、〈延喜聖代〉は小秘事である。

習物は、特別の謝礼を払い免状をうけて伝授される曲で、「炎上物」「読物」など、主題別に分けられ、三十三曲ある。〈朝敵揃〉は「揃物」のひとつである。

秘事というのは、平家の教習課程の最後に

習う曲で、現行の前田流では、大秘事に〈宗論〉〈劔之巻〉〈鏡之巻〉、小秘事に〈祇園精舎〉〈延喜聖代〉がある。大秘事は、平家の宗匠、総検校、公卿大名にしか許されなかったので、一般の演奏者には、小秘事が実質的に最後の曲となる。その伝授には、秘事以外のすべての曲を習得していることが条件で、寛政三年（一七九一）の記録では、謝礼は銀三枚、樽肴、反物で、七日間の精進を必要としたという（館山一九一〇：九三四）。しかもその演奏は、「さらひの外は一世に三度」（館山一九一〇：九三五）と厳しく制限された。

秘事は、その詞章が天皇や高野山に関連する話を扱い、後述のように儀礼的な場で演奏されるものであったことが推測される。音楽的には、大秘事にやや特殊な節付けがみられるだけで、平物とあまり変わらず、技術的にもそれほど特殊なものではない。

四．〈延喜聖代〉における鷺　平家〈延喜聖代〉は醍醐天皇の治世を賛美した祝儀曲である。醍醐天皇の誕生から即位までを述べ、その治世のすばらしさを中国の故事を引いてたとえ、その後、神泉苑の鷺、寒夜の御衣、北野・嵯峨の御幸という三つの例を引き、すぐれた治世で長く平和が続いたと締めくくる。鷺の話だけが《平家物語》と重複している。

鷺の記述は短く、節付けはきわめて地味で、用いられている曲節は、口説と初重である。口説は、平家の地の語りともいうべき曲節で、言葉のアクセントにそって、基礎音とその四度上の音（謡でいえば、中音と上音）を上下する単純な旋律を持つ。鷺の話のほとんどは、この口説でさらさらと語り進められる。「全く是は鷺の御りょうにはあらず、ただ王威のほどをしろしめさん為なり」という結びの一文にのみ初重という曲節がつく。初重も口説と同じ音を基礎音とする曲節だが、音楽的には、メリスマを多用して、ゆったりと優美に歌われる。メリスマというのは、謡の増し節の長いものといったらよいだろうか、母音を引きながら長々と節付けして伸ばす謡い方である。初重の最後は謡の下音にあたる音まで基礎音が下がり、声を長く引いて終わる。平家〈延喜聖代〉は、鷺の話の前後に、むしろ音楽的な聴かせどころがある。（粗筋および節付けは平家正節刊行会一九七四による）。

なお、平家を表芸とする琵琶法師座の当道座では、積塔会という大きな年中行事で必ず〈延喜聖代〉が演奏された。当道座が明治初年に廃止されたあとも、名古屋の盲人音楽家の間でこの習慣が「仁康祭」として続いている。しかし〈延喜聖代〉の伝承は第二次世界大戦で途絶え、現在は〈我身栄花〉の一節が代わりに演奏されている。

五．〈朝敵揃〉における鷺　〈朝敵揃〉の大略は以下の通り。頼朝謀反の報せに平家武者たちの反応はさまざまだが、清盛はひどく怒る。そもそもわが国の朝敵は二十人余、みな滅ぼされている。かつて醍醐天皇の王威はすばらしく、鷺でさえその命令に従ったというもの。この曲では朝敵の名前を列挙するので「揃」という名が付く。鷺の話は、曲の終わりで用いられ、詞章も曲節の付き方も〈延喜聖代〉と同じである。

この二つの曲での鷺の扱いを見る限り、このままでは、能の素材としては、詞章だけでなく、音楽的にも淋しかったということがわかる。延年の劇や、風流舞を取り入れることによって、演劇的にも音楽的にもさまざまな工夫が必要だったであろう。

（武蔵野音楽大学教授）

【引用文献】

館山漸之進　一九一〇
『平家音楽史』木村安重刊。
平家正節刊行会　一九七四
『平家正節』京都：大学堂書店。
松岡心平　一九八四「作品研究〈鷺〉」
『観世』六月号二〇－二四ページ。